

〈各地の学会・集会報告〉考えてみよう長野県での協同を 1993年11月 長野県

考えてみよう長野県での協同を！第3回集会

柄澤 義郎（長野中高年雇用福祉事業団）

「考えてみよう長野県での協同を」第3回集会は、11月13・14の両日にわたって、長野県小諸市及び北御牧村において開催された。第1日目は、協同の運動にとって貴重な教訓を示す、北御牧村のデイサービスセンターを見学し、第2日目は、小諸市J A 東信会館に於て全体集会がもたれた。

この集会には、コープながの、長野県厚生連労働組合、長野医療生協、長野中高年雇用福祉事業団など、全県下のさまざまな分野から19団体・136人が参加した。

住民主体のデイサービスセンター

北御牧村のデイサービスセンターは、人口5500人、高齢化率22%のこの村に、1985年のヘルスクリーニングの総括の中で、高齢者の健康管理について、さらに質の高いものをめざすには——の討論からはじまり、保健指導員及びそのOGが中心となって、住民運動によって作りあげられてきたものであり、「ねたきり老人をつくらない」を基本的な考えにすえ、運動の参加者自身がヨーロッパ研修の上になつて平面図をひき、ねりあげて設計したというだけあって、物置以外はすべて床暖房、天然温泉利用のリフト使用もできる展望浴室、一切段差をなくした設計など利用者本位のすばらしい施設となっている。その運営にも、例えばボランティアの人たちが、利用者の立場になつて行政に意見を反映することを制度化するなど、徹底して利用者優先で運営されており、まさにこれこそみんながつくり、みんなが運営する＝協同と愛の理念が貫かれた施設＝といえるのではないか。この運動から学ぼうという今回の協同集会の設定に共感できるものであった。

高齢者がリードする協同の時代

全体集会における神戸大学教授、二宮厚美先生

の「高齢者がリードする協同の時代」と題した基調講演は、協同発展のためには「見わたし、見つけ、見つめ、見直し、見通す」の5つの視点をもって取り組むことが大切だとし、まず地域と暮らしのなかに協同の課題を見つけ、見つめよう——本当の豊かさを求める地域住民の要求は発展している。経済大国日本では、時間・空間・人間ととも間に抜けているといえる状況におかれている。

即ち「長時間労働と自由な時間の貧しさ、ゆとりのない地域生活、土地・住宅問題の悪化と生活空間の貧しさ、教育・福祉問題や人間関係の希薄化」、しかしその中で一方、地域の再生と地域を担う人々は、その専門的能力、評価能力、そしてその享受能力も発展している。

このような中で、相手のある要求と、共同化すれば実現できる要求をとともに重視し、地域や暮らしの内部のカンファタブルな関係を重視していくなれば、そこには大きな力が存在するであろう。

その上になつて、社会保障、福祉の理念、ナショナル・ミニマム保障の公的責任を明確にする運動など、住民生活と人権本位の福祉の発展のための運動の必然性を見直すこと。さらに、評価能力を高めて、やりがい、生きがいを見出し、豊かな目標をもって応答・共感関係を育てていくなれば、その力はさらに発揮され、小さい花が集って、うとうとうしい時にこそ鮮やかに、そしてまた各々に個性をもった「あじさいの花」のような「協同の花」が咲き競うであろう＝という、笑いをさそいながら解りやすく「協同」への勇気と確信を与えられる基調講演であった。

地域づくり協同政策

プロジェクトの中間報告

特別報告として行なわれた、工学院大学の内山哲朗先生の「地域づくり協同政策プロジェクトの

中間報告」は、これまでの長野県における協同集会の経過を総括した上で、この集会の目標・課題を明らかにし、今後どう発展させていくべきか、その方向を示すものとして、本集会の基調をなすものであった。

第3回集会までの経過、1・2回集会の意義

まず、長野県における協同集会が、第3回を迎えるまでの経過について次のように総括された。

1987年2月に、協同組合及び関係団体によって「長野県協同組合間懇談会」としてはじまったこの運動は、「考えてみよう長野県での協同を」をスローガンに掲げ、これまで2回にわたって相互交流をつみあげてくる中で、

- ① 協同を求める団体と個人の連帯と協同の可能性を拓き、協同組合セクター確立の展望をつかむ
- ② 協同と連帯により「仕事をおこし、地域をつくり、人を育て、文化を高める」運動と事業を創造するような実践の方向性をさぐる
- ③ 参加諸団体の自主・自立を尊重し、相互の運動と事業の発展に、協同が貢献できるよな、具体的・現実的な方向をさぐる

の3点を共通の目的として設定し、つみ重ねられてきた2回の集会は、まず県内において農業・消費・生産・医療・福祉・教育・文化等さまざまな領域での「協同を求める運動と事業」が、協同組合あるいは非営利団体の形で広範に存在することを確認し、新鮮な感動を共有したこと。

そしてそれは、これらの存在の相互確認と出会いの場を提供すると同時に連帯の輪を広げるものであり、これを通じて実際にどのような「連帯と協同の実践」ができるのかということ、問題意識の基底にすえられていたこと。

これらが問題意識の共有と同時に「協同を求める運動と事業」の実践と理論・思想の理解を深める上でも大きな意義をもつものであったこと。

第3回集会の目的・あらたな地点への出発点

その上になって開かれた今回の第3回集会は、「存在の相互確認、実践理論の学習機会」という今までの地点を越えていく必要があるのではない

か」長野県での将来の協同運動をみすえて「地域づくり政策」を有効に貢献しうるような「事業や運動の現実的な協同の可能性」を具体化することへふみだすための出発点にしようということになった。そして、この集会の発展段階が示された。

具体化の方向

そして、これらを具体化していく方策として、「地域づくり協同政策プロジェクト研究会」の設置となり、「研究会」は「地域づくりのために協同の力でなができるのか」との問題意識にそって高齢者福祉を基本テーマにすえることを確認した上で、小諸・北佐久地域における高齢者福祉の実践から学びつつ、「高齢者協同組合」構想をとりあげて、高齢者生活福祉へ協同からのアプローチを検討することになった。

「抽象的な可能性」から「現実的な可能性」へ

さらに「研究会」は、「地域社会における生活福祉システムの形成」という大きな実践目標をすえ、住民組織と自治体の連携が具体化されていけば、協同の力による具体化が、現実的な視野にはいつてくるだろう。として、長野県での第3回集会は、1・2回集会及び「研究会」のつみあげによって「抽象的な可能性」から「現実的な可能性」へ大きく足をふみだしていく契機となるべき集会であることが明らかにされた。

さらに、小諸・北佐久地域での実践は「地域社会において住民が主体となることを軸とした地域住民の協同運動の展開」として特徴づけ、その上になって提起されている高齢者協同組合の基本コンセプトの解明を通じて、高齢者運動の大きな展望が示された。

胸をうつ北御牧村の実践報告

特別報告の北御牧村サービスセンター主任の土屋桃江さんの報告は、「思いやりの心をこめて」「お年寄りの心に添う」実践に、手応えを感じながら、さらに質の高いサービスをめざしての奮戦記として、住民が主体となった協同の運動のすばらしさを示してくれ、すべての参加者の胸をうつものであった。